

第188回くらしの植物苑観察会 2014年11月22日(土)

— 菊細工のはなし —

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室専門員)

菊細工とは、一般に、鶴や象などの鳥獣、富士山や二見が浦などの風景、宝舟や唐子などの縁起物、汐汲や暫などの物語を、小菊で形作った見世物のことをいいます。「菊の作り物」、「作り菊」などとも呼ばれ、「菊人形」の前身にあたります。

本日の観察会では、菊細工の内容と出品した植木屋の名を掲載した番付「菊細工番付」や浮世絵をいくつか紹介して、その特徴を見ていきます。

1 菊細工番付 墨刷のもの

○歌川美丸画／森屋治兵衛板『巢鴨名産菊の栞』文化11年(1814)(早稲田大学図書館蔵)

菊細工は、はじめ文化年間(1804-18)に巢鴨を中心に流行した。本番付には、山東京伝、式亭三馬、山東京山、十返舎一九、曲亭馬琴、市川三升、立川焉馬といった有名狂歌師の狂歌が付され、冊子体に作られている。記載がある菊細工は、全部で52種類。

○一勇斎芳艶画／神田鍋町中村屋藤四郎板「そめり菊の道順」弘化2年(1845)(個人蔵)

菊細工は一度廃れた後、天保15年(1844)と翌弘化2年(1845)に再び大流行した。本番付は、弘化2年の染井の植木屋だけを集めたもの。植木屋金五郎は、雪達磨の菊細工を出品するが、天保15年と弘化3年は象を、弘化4年は狐を出品し、雪達磨は弘化2年のみである。このように、複数の番付の菊細工を照らし合わせることによって、番付の制作年代がわかる。



○「向島菊の番附道順」弘化2年(1845)(個人蔵)

菊細工は、巢鴨・染井・団子坂(現在の豊島区・文京区)を中心に流行したが、絶頂期の弘化2年には、向島(現、墨田区)でも行われた。『藤岡屋日記』には、13番までしか記録されず、70軒以上が菊細工を披露した巢鴨・染井・団子坂に比べれば、寂しいものであった。

2 菊細工番付 色刷のもの

菊細工番付には、冊子体や一枚刷という形式のほか、絵図形式や数枚で一組になる組み物もある。なかでも珍しいのは、色刷で組み物の番付であろう。

○「名所ぎく独あん内」弘化2年（1845）以降（個人蔵）

菊細工の内容は記されておらず、その道筋と植木屋の名前だけを印刷したもの。画面左上の染井にいる「伊兵衛」とは、『花壇地錦抄』を刊行した伊藤伊兵衛の子孫。天保15年には菊細工を出品していないので、翌弘化2年以降の成立とわかる。

○歌川芳艶画／上州屋金蔵板「染井駒込巢鴨 新板改正造菊番附」弘化2年（1845）（個人蔵）

画面上部の市松模様は菊花壇の障子を、画面下部は花壇の盛り土をそれぞれ表している。4枚一組の組み物で、なおかつ色刷りで揃っているのは大変珍しい。

3 菊細工が主題の浮世絵

菊細工は、浮世絵にも多く描かれている。菊細工そのものを主題にした作品は、文政元年（1818）、天保15年（1844）と翌弘化2年（1845）と、菊細工制作と同じ年に描かれており、流行を追う浮世絵師が恰好の画題として選んだことがわかる。

○歌川豊国「菊の細工物 市川団十郎 瀬川菊之丞 暫」文政元年（1818）当館蔵

菊人形史において注目度の高い一図。文政元年11月、玉川座で上演された「暫」の役者の顔に似せて、両国広小路で菊人形として興行された。「二つの人形大じかけ、まわり道具早かわり」とあるように、歌舞伎役者が早変わりするがごとく、人形の入れ替わりの趣向もあった。肩のあたりの白菊や、団十郎の三升の紋（白菊と紅菊）の質感は特に見事であるが、浮世絵師によって、実物とは異なり美しく飾り立てられたと考えられる。

○歌川国芳「流行菊の花揃 巢鴨植木屋弥三郎」弘化2年（1845）豊島区立郷土資料館蔵

巢鴨の弥三郎は、天保15年のときも富士山を作って評判がよかったので、目先を変えてまたまた富士で作ったところ、三国一との評価を受けたという。変更点は近景に鶴が3羽増えた程度で、主役の富士山は同じである。

○歌川芳虎「流行菊花揃 染井植木屋金五郎」天保15年(1844)当館蔵

象の大きさは、1丈(約3メートル)。象の実物を見る機会が少なかった江戸市民にとって、珍しさが先に立ち評判を呼んだ。象の体や敷物の縁をギザギザにして菊の質感を出している。

4 菊細工を背景に使う浮世絵

幕末期には、菊細工そのものを主題にした作品のほか、年中行事の一つである「菊見」や、役者見立として浮世絵の背景に採用され、その普及ぶりがうかがえる。

○歌川国芳「江戸名所見立十二ヶ月之内 九月 巢鴨智恵内」嘉永5年(1852)9月(国立国会図書館蔵)

歌舞伎「鬼一法眼三略巻」の「奴智恵内」、実は「鬼三太」が前面でポーズをとり、背景には、もこもことした饅頭のような黄菊で富士山がそびえ、周囲に四阿と菊花壇を示す市松障子が見える。ここでは、現実の巢鴨の植木屋の庭そのものを、歌舞伎の場面に見立ててている。この浮世絵が刷られた嘉永5年に富士山の菊を出品したのは、巢鴨の斎田弥三郎しかおらず、人気の歌舞伎の役どころと、当時の流行り物の弥三郎の庭に結びつけた絵画といえる。

※参考○〔菊細工番付〕嘉永5年(1852)9月(文京ふるさと歴史館蔵)

○歌川国輝「当世菊見ノ図」天保14年(1843) - 弘化4年(1847)(国立国会図書館蔵)

帆掛舟の菊細工をして「当世菊見ノ図」と、当時流行の菊見は、菊細工を見るものだといわんばかりの情景である。帆掛船の菊細工は、弘化2年に染井の谷金蔵、略して「谷金」と称した植木屋が手がけたことがある。



.....

次回予告 第189回くらしの植物苑観察会 2014年12月20日(土)

「サザンカの魅力」箱田 直紀(恵泉女学園大学・名誉教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要

只今千葉県立中央博物館では秋の展示「どんぐりの世界」展を開催中!

※当館植物苑の入園券を提示していただきますと、オリジナル缶バッジがもらえます。